

西洋のスーフィズム認識に見る諸問題 — 宗教と近代を巡る言説の変遷を通して

高尾 賢一郎
同志社大学大学院神学研究科

要旨

本稿の目的は、近年の西洋の研究におけるスーフィズム（イスラーム神秘主義）についての認識を取り上げ、そこに見られる問題点を、西洋における近代と宗教との関係を巡る言説の変遷を参考しつつ明らかにすることである。具体的には、近代以降のイスラーム世界において「脱中世」的イスラーム思想と「脱イスラーム」的世俗主義に対し守勢に立つスーフィズムが、一方で西洋の研究においてはポスト世俗化の宗教形態として注目を浴びている今日の言説状況を整理し、その西洋のスーフィズム認識と西洋世界を中心とした宗教と近代を巡る言説の変遷との平行関係を検討する。そしてスーフィズムを「原理主義的でない」、「世俗化した」イスラームの形態であり、現代西洋社会に親和的な存在であるとして好評価する西洋の認識の潮流を、そこに見られる用語の意味破綻と期待の認識論的誤謬の点から批判する。それを経て本稿は、今日見られる西洋によるスーフィズムへの好評価がイスラモフォビア（イスラーム恐怖症、嫌悪）と密接な関係を持つものであり、さらにはそのイスラモフォビアを覆い隠す恣意的な宗教言説として捉えうると結論付ける。

キーワード

イスラモフォビア（イスラーム恐怖症、嫌悪）、原理主義、宗教研究、世俗化、スピリチュアリティ

1. 問題設定

本稿の目的は、近年の西洋の研究におけるスーフィズムについての認識を取り上げ、その問題点を、西洋における近代と宗教との関係を巡る言説の変遷を参考しつつ、明らかにすることである。

「イスラーム神秘主義 Islamic mysticism」の訳語で知られてきたスーフィズム(アラビア語でタサウウフ)は、哲学、神学、詩文学などへの洞察とそれを反映した儀礼伝統を持ち併せた、中世以来のイスラーム思想・実践である。概説的な通史理解に倣えば、その古典期は8-9世紀のアッバース王朝を中心に見られた禁欲主義であり、その後9-10世紀に明確な修行論が誕生、イブン・スィーナー(アヴィセンナ)の活躍に代表されるように哲学・科学に関する外来思想の影響も受けた。そして12世紀以降はイスラーム王朝が西アジア、北アフリカ、アンダルスへと広がる過程で、求心力を備えた指導者を擁する組織、つまりアラビア語でタリーカと呼ばれる教団が機能し、それを通してその後のオスマン王朝、ムガル王朝、またサファヴィー王朝といった大国において政治、社会活動にも広く携わったⁱ。以上を踏まえてスーフィズム研究の大まかな分類を把握する場合は、初期禁欲主義(神秘主義の起源、キリスト教由来説を始めとした外来说の検討など)、初期思想家群(ホラーサーンやバグダードで活躍した人物の研究)、10-11世紀の手引書(初期タサウウフの教学研究)、12-13世紀の思想家群(ガザーリー、スフラワルディー、またイブン・アラビーといった著名な思想家個人の研究)、スーフィー教団の誕生と発展(王朝史、または特定地域における教団の役割などの研究)というテーマの内、いずれを重点的に取りあげているかという基準が一つに参考となるⁱⁱ。

しかしながら、近代においてスーフィズムは、18-19世紀のサラフィー主義やワッハーブ運動に代表される「脱中世」のイスラーム改革主義思想の潮流、さらに20世紀(国民国家成立後)のトルコ、エジプト、イラク、シリア、またチュニジアなどに見られる「脱イスラーム」の世俗主義、社会主义国家の台頭によって、社会におけるその影響力が衰退したとしばしば指摘される。具体的には、まず思想面に関して従来の神智学的な側面が敬遠され、代わってムスリム一般に通じうる聖典主義に依拠した思想を掲げる傾向が現れ、それは時によってイスラーム的あるいはスンナ派的と呼ぶ他ない、「神秘主義」と呼ぶには「ある意味では陳腐な主張」となったⁱⁱⁱ。また教団、つまり組織面に関しては世俗主義政府による教団の封鎖(トルコ)や管理(エジプト)などが進み、従来備わっていた組織力とそれを通した軍事力、社会における影響力、求心力が少なからず失われた。以上を踏まえて近現代を対象としたスーフィズム研究の性格を指摘するならば、文献学的にその特徴を抽出することの困難に直面した思想研究は数が減り、代わって人類学を中心とした教団研究の数が増えたものの、それらは「脱中世」的イスラーム、あるいは「脱イスラーム」的世俗主義といったスーフィズムに親和的とは言いがたい状況との相克を描き出すことを通して、翻ってイスラームと近代、いずれの文脈においても周辺的な位置にあるというスーフィズムの苦境を示唆していると

見ることもできる。

その一方で、今日のスーアイズムの事例を注目に値するものとして積極的に取り上げ、評価する研究の増加が近年の西洋では著しく、スーアイズムへの関心の高さがうかがえる。次節ではそれらの研究の特徴を整理する。

2. 西洋のスーアイズム研究

イスラーム世界のスーアイズムを対象とする西洋の研究としては、A・J・アーベリーやJ・S・トリミンガム、A・シンメルやJ・バルディックなど、ヨーロッパの東洋学者によって20世紀中盤以降に著された概説書が今日に至るまで参考にされている^{iv}。またそれと並行して、西洋発のスーアイズムとしてI・アゲリ(1869-1917)やR・ゲノン(1886-1951)、F・シュオン(1907-1998)やM・リングス(1909-2005)といった、ヨーロッパ人の改宗ムスリム／スーアイーの存在および彼らの著した教学書も一時注目を浴びた。比較的近年、1990年代以降では、移住ムスリムによる西洋社会のスーアイー教団の活動を事例とする研究が目立ち始め、スーアイズムが世俗化した現代キリスト教社会においてどのような存在になるかという議論が盛り上がりを見せ始めた。これらの研究はイスラームの思想・実践としてのスーアイズムの内的様態の解明というよりは、むしろ他者としてのイスラームへの対応、評価を模索することへの関心に基づいていると言える。

とはいって、西洋におけるスーアイズムへの関心は必ずしもイスラーム研究の系譜に組み込まれてきたわけではない。例えばアメリカの宗教学者G・ウェップは、20世紀のアメリカにおけるスーアイズム潮流の特徴を次の三段階に分けている。第一段階は20世紀初頭、ヨーロッパの植民地政策の影響で起こった「他者としての東洋」に対する関心に基づいたもの。第二段階は1960-70年代に起こった人種差別やベトナム戦争に影響を受けた「カウンター・カルチャー」としての関心に基づいたもの。そして第三段階は1980-90年代以降の、宗派や宗教を超えた共同体の形成と拡大への指向に沿う「代替宗教」的存在としての関心に基づいたものである^v。さらにその関心の系譜を更新するならば、「テロ」、「イスラーム原理主義」、「中東紛争」、「9.11」といった、西洋にとっての脅威の象徴として「イスラーム」が引き合いに出されやすい今日の言説の中でスーアイズムの存在が状況打開のための重要な鍵として言及されるという特徴が挙げられる^{vi}。それ故、イスラーム世界のスーアイズム史には必ずしも連ならない以上のようなスーアイズムへの関心と洞察は、概ね今日のスーアイズムの盛行を認め、その存在意義を強く主張するものとなっている。

こうした傾向を備えた典型に挙げられるのが、近年に相次いで出版されたJ・マリク&J・ヒネルズ、M・v・ブルイネッセン&J・D・ハウエル、C・ロードヴェ

レ&L・ステーンベリ、そしてR・ギーヴス&M・ドレスラー&G・クリンクハマーによる論集である^{vii}。各所収論文の全てが該当するわけではないが、論集に概ね共通する点を頼りにその研究動向としての特徴を指摘すると、まず挙げられるのは世界規模でのスーフィズムの今日の盛行を認める点である。それは主にスーフィー教団の精力的な行動主義に基づいた認識であり、具体的には著作の刊行やホームページの開設といったメディアの活用、またムスリム以外にも唱名(ズイクル)などのスーフィズム儀礼を体験させるカルチャースクール感覚の場の設立を通した「スーフィズム市場」の誕生などに注目している^{viii}。そして次に挙げられる特徴は、スーフィズムを「世俗化した現代キリスト教社会」に親和的なものだと主張する点である。一つ目の特徴で挙げたようなスーフィズムの変容は「世俗的」、「現代的」、「ポストモダン」、「消費(文)化」、「スピリチュアリティ」、または「ポップカルチャー」、「ニュー・エイジ」、「新宗教運動」の産物などと認識、形容され、それによってスーフィズムにはイスラームが「世俗化した現代キリスト教社会への適応」を果たしたものだという関心が寄せられている^{ix}。

以上の二つの特徴が研究史上にどのような影響をもたらしうるかについて考えた場合、次の可能性を指摘することができる。まず一つは前節で述べた、近現代においてスーフィズムが守勢を余儀なくされているという状況認識の再検討を促す点である。つまりスーフィー教団の指導、あるいはスーフィズムの旗印の下で展開される今日の多様な活動を認識することで、従来多様性を伴っていた「タリーカ」の領域が近代以降の国策によって人為的に「スーフィー教団」に留まった点を振り返ることができ^x、それを通して「近現代「世俗化」としばしば同義とされる「近代化」を目指す人為による統治)においてスーフィズムは衰退した」という認識がある意味で有り体な近代化／世俗化論の視点でありえたということ、そして近代化／世俗化論に対する批判、再考の過程でスーフィズムを巡る状況が対象に加えられるべきであったことが分かる。

そしてその近代化／世俗化論と関係したもう一つの可能性は、今日のスーフィズム研究が「宗教研究」と「イスラーム研究」を架橋しているという点である。非イスラーム世界の「イスラーム研究」は文献学を中心とする19世紀ヨーロッパの東洋学、そして政策科学としてのアメリカの地域研究を先駆とし、本邦ではイスラーム王朝史、および王朝下の社会・経済史研究を中心とした歴史学(東洋史)が中核となって進められてきた。近年に関してはアメリカ型の地域研究の手法に連なる近現代政治史、政治学の分野による蓄積が盛んであり、イスラーム研究は一次文献読解や臨地調査といった従来の手法を基本としながら、社会科学系学間の手法も積極的に参照するものとなっている^{xi}。したがって「イスラーム研究」は今日15億以上と言われる数の信徒を擁する世界宗教イスラームをその最

大公約数的な関心、考察の対象としつつも宗教諸科学を射程とはせず、今日「宗教研究」と呼ばれる分野に属する学問であることを求められてきていない^{xiii}。こうした研究史上の系譜に必ずしも起因した問題ではないが、イスラーム研究と宗教諸科学との差異を示した比較的記憶に新しい事例が、近代化／世俗化論であったと思われる。

J・カサノヴァの事績に代表されるように、世俗と宗教の分化説として近代化的プロセスを描き出した世俗化論の特徴の一つは宗教の衰退や私事化といったその下位命題にあり、宗教諸科学、特に宗教社会学はB・R・ウィルソン、Th・ルックマン、P・L・バーガー以来、「前近代=宗教的／近代≠宗教的」という図式の是非を現象や制度毎に実証する作業を世俗化議論の中心としてきた^{xiv}。しかし宗教諸科学に属さず、歴史学による王朝史研究、また政治学による国家動向分析が盛んとなり始めたイスラーム研究の世俗化考察において研究者の関心が最も広く共有されうる問題設定となった「世俗化」の諸相は世俗主義政策であった。つまり、イスラーム研究で「世俗化」と言えば、それは特定国家の宗教を巡る政策や社会におけるその影響に焦点を当てたものであることが圧倒的に多い^{xv}。そして1970年代以降のいわゆる「イスラーム復興」の時代を迎えた際には、イスラーム研究者は1960-70年代の世俗化論—特にその下位命題—の批判に努めた^{xvi}。批判が向けられた主たる矛先は近代化論の単線的な性格(近代化=世俗化=宗教の衰退)であり、それを受けて提唱されたイスラーム世界の複線的近代化論は宗教復興と世俗化(の要素)との並立を指摘しつつ、それが「イスラーム」への強い自覚の下で生じるものであることから、最終的にはその世俗化もイスラーム復興の一環として捉えた^{xvii}。

このように、イスラーム研究は世俗化考察における関心を宗教諸科学の世俗化論とは共有せず、むしろ世俗化論を現状認識と近代化論の両面から否定した。したがって、イスラーム研究は宗教諸科学に見られた世俗化以後／ポスト世俗化といった現代宗教考察に関する問題設定を必要とはせず、機能宗教的理解や代替宗教といった、世俗化論以後の宗教学的宗教論を採用する機会も持たなかったのである^{xviii}。

しかしながら、本節冒頭で挙げたものに代表される西洋の近年のスーアイズム研究は、その描写の中で用いている表現や対象認識から分かるように、世俗化論以後の宗教論、また先述のウェップが指摘したスーアイズムを巡る関心の第三の潮流に依った論調の性格を備えている。本節は先にこの性格をスーアイズムによる「宗教研究」と「イスラーム研究」の架橋と言い表し、研究対象「スーアイズム」のインターフェイスとしての可能性を示唆したが、一方で何故この潮流が起り、継続しているのかについての検討も必要である。次節ではその第一歩とし

て、スーアイズムに対する評価を巡る問題点を指摘したい。

3. スーアイズムへの評価を巡る諸問題

宗教史学を専門とする深澤英隆は、mysticism の語が 18 世紀後半から 19 世紀にかけて人口に膚浅したものであることを背景に、「神秘主義」を近代宗教言説の一形態と捉える^{xviii}。ポスト近代において、それに取って代わったものの一つとして挙げができるのは「スピリチュアリティ(新靈性文化)」であろう。スピリチュアリティの語は、1960-70 年代の西洋で見られた「ニュー・エイジ」や「精神世界」と呼ばれるものを含み、1990 年代から宗教界、また宗教研究のシーンで盛んに用いられるようになった。西洋社会におけるその初期の特徴として挙げられるのは、カウンター・カルチャーやオルタナティヴに連なる、既存の伝統宗教への否定的な態度という性格である。しかし近年ではそうした性格に限らない、既成の伝統宗教との緩やかな協働関係への指向が確認されている^{xix}。前節で挙げたスーアイズム研究がスーアイズムの在り方を「スピリチュアリティである」と形容する文脈にも、宗教横断的な新しい靈性文化としての存在意義としての期待をスーアイズムに対して寄せている様子が見て取れる^{xx}。

ただし、一連のスーアイズム研究においてスーアイズムをスピリチュアリティと認識する場合に強調される内容には、スーアイズムが他者の既成宗教には協働的でありつつ、自己の既成宗教には対立的な立場にあるのだという、その協働性に関する偏向した期待、評価が見られる点に注意が必要である。これまでにも同様の対立構図によってスーアイズムを好評価するものはスーアイズム研究以外にも見られ、例えばフランスの学界でイスラーム主義やヨーロッパのイスラーム化に反対する主張を続けてきたアラブ史学者の A・デルカンブルは、制度的な伝統宗教イスラームに比して、スーアイズムは自由で、世俗的で、共和主義的なものだとして、その惚れ込みようを語っている^{xi}。それを踏まえて、ここで近年の西洋によるスーアイズム研究の三つ目の特徴を挙げるならば、それは今日のスーアイズムの盛行を伝統宗教イスラームの盛行とは捉えず、「(スーアイズムは)宗教の文脈化を拒む原理主義者の態度と対照的な(ものだ)」という具合に、現代キリスト教社会に適応する「スーアイズム」とそうではない「伝統宗教イスラーム」との対立構図を前提とした上で、スーアイズムを「世俗化した」、「原理主義的でない」、「あらゆるイスラーム的表現に対する代替靈性」として賞賛する点である^{xii}。つまりこの文脈においては、先述した「スピリチュアリティ」概念の今日的側面、即ち既存の宗教伝統との対立に限らない、緩やかな協働関係という側面が等閑に付されており、むしろそこで示唆されるのは西洋側による「伝統宗教イスラーム」への否定的な態度、そしてスーアイズムを「伝統宗教イスラーム」と対置させた

上で、「敵の敵は友」として評価する姿勢である。

スーフィズムが「スピリチュアリティ」と形容されることの問題に続き、スーフィズムへの評価の文言にしばしば登場する「原理主義」と「世俗化」という他の二つの用語を巡る問題にも触れる必要がある。まず「原理主義」であるが、イスラーム世界におけるスーフィズムの役割を通観すれば、特にスーフィー教団の確立以降、それはしばしば反体制的な武装民兵組織の役割を担い、特に近現代ではヨーロッパの植民地政府と対立する軍事勢力となってきた^{xxiii}。そして先述したように、近現代以降のスーフィズムによる主張はその独自性を抑制し、聖典主義を掲げることで自らのイスラーム内での正統性を「素朴に」訴えるという傾向が見られ、今日では公共圏でのその精力的な活動ぶりが他ならぬ西洋の研究によって認められている。つまり本来ならば、公共圏での活発な行動を繰り返して聖典主義を掲げるスーフィズムが、同様の特徴によって定義されてきた西洋起源の「原理主義」団体、また西洋から「原理主義」と形容される他のイスラーム系団体から区別される理由はない^{xxiv}。同様に、現代イスラーム世界の世俗主義と対等ではないが対峙する立場にあり、公共圏において「市場」を確立して社会における存在感を強めているというのであれば、スーフィズムは「世俗化」と呼ばれる西洋定義の状態とはほど遠いと言える。スーフィズムをイスラームの「世俗化した」形態と捉える評価においても、やはり示唆されるのは、西洋による「世俗化していない」「伝統宗教イスラーム」への否定的な態度、そして近代以降のイスラーム世界で周辺的な地位にあるスーフィズムを、「伝統宗教イスラーム」に対置させ、それを「敵の敵は友」として評価する西洋の認識である。

以上のように、近年の西洋のスーフィズム研究における「スピリチュアリティ」、「原理主義」、「世俗化」の語用状況からうかがえるのは、スーフィズムの今日的展開よりは、むしろそれらの語の分析概念としての破綻であり、特定の文脈において同語がレトリック、あるいはラベリングとして活用されている様である。ここにおいて本節は、西洋における近年のスーフィズム研究が抱える問題点を以下の通り指摘したい。一つは、近現代のスーフィズムの状況に関して指摘される、その正統イスラームへの指向一反スーフィズムを掲げる宗教純化の思想から自己防衛を図りつつスーフィズムのイスラーム内での正統性の確保を目指すという主張の傾向一が無視されるという、方法論上の問題である。これについては「スピリチュアリティ」、「原理主義」、「世俗化」の語用を巡る検討を通して先に明らかとなった。そして二つ目は、一つ目の問題点で述べたような自明な矛盾を孕みながら積極的にスーフィズムを好評価するという、西洋のスーフィズム言説における認識論的な誤謬である。これについては、スーフィズムへの肯定的な評価がイ

スラームに対する否定的な評価を前提としている点、つまり「スーアイズム」が西洋にとっての「イスラーム」に対するカウンター・パートとしての役割を担わされている点から、やや政治的な背景を伴う側面もあると言える。それを受け、最後に次節では何故そのカウンター・パートがスーアイズムなのかという点に言及し、今日の西洋の宗教言説におけるスーアイズムを巡る外在状況の一端を指摘することで結びとしたい。

4. 結語

最後に本節では、今日の西洋がスーアイズムを評価する基準を明らかすることで、そのスーアイズム言説を形成する構造の問題点を示す。

既に述べたように、スーアイズムの今日的潮流の背景としては「テロ」、「イスラーム原理主義」、「中東紛争」、「9.11」と関連付けられた、西洋にとっての脅威の象徴としての「イスラーム」を巡る言説の中で、スーアイズムをイスラーム内／外の一種の希望のような存在として見るという側面がある。それは逆に言えば、スーアイズムが西洋にとっての脅威の象徴ではないことを示唆しており、それを通してスーアイズムには「原理主義でない」、「世俗化した」という評価が与えられることになる。このことを傍証する事実として挙げられるのは、今日のウズベキスタンで「ムジャーヒディーン（ジハードを遂行する者たち）」と呼ばれる武力行使団体として活動するナクシュバンディー・スーアイー支教団の存在であり、それは上述した「脅威」の典型に該当する性格を持つが故に、管見の限り一度も「原理主義」的でない、「世俗化」したイスラームの形態などとは西洋において評価されていない。このことは、西洋のスーアイズム評価の基準の本質がスーアイズムそのものではなく、その勢力が西洋にとって、あるいは西洋の視点を通して特に社会的な意味での「障害」と映るかどうかに依っていることを示している^{xxv}。

以上の点を踏まえると、今日のイスラームを巡る西洋の言説の内、イスラームに対する脅威をその中心とするにもかかわらず、スーアイズムの文脈には現れていないキーワードの存在が浮かび上がる。それは「イスラーム」を「原理主義」的で「世俗化していない」、西洋にとっての脅威と感じる際の西洋の応答、つまり「イスラモフォビア（イスラーム恐怖症、嫌悪）」である。イスラームの宗教思想・実践であるスーアイズムの西洋における受容は、一見するとイスラモフォビアの存在を否定する現象とも思えるが、既述の通りその受容は「イスラーム」と「スーアイズム」との恣意的な対置構造、そして「イスラーム」に対する否定的な評価（イスラモフォビア）を前提としている。その上でスーアイズムを好評価することの西洋にとっての意義は何かと言うと、それは今日の宗教言説の中で叫ばれる「宗教間協力」や「他宗教への寛容」といった標語の実践を、本来それと

は真逆のイスラモフォビアと並立させるという点にあり、その意義はまたイスラモフォビアの存在を覆い隠すことにもつながる。つまり正統イスラームの旗印を掲げつつ、西洋に対する脅威とは最早ならない今日のスーフィズムは、西洋にとってそれを認めることで損害を被ることのない「認め得」の対象であるばかりでなく、イスラモフォビアの存在を覆い隠すのに都合の良い、格好の他者として西洋の宗教言説の中で位置付けられていると言えるのである。

註

- * 本稿は2010年3月6日の「宗教と社会」学会関西地区大会での研究報告、および同年6月6日の「宗教と社会」学会第18回学術大会におけるテーマ・セッション「現代社会における宗教社会学の可能性—「世俗化論」以後の課題と応答—」内研究報告の内容に加筆修正を行なったものである。
- i 東長靖 1993 「スーアフィーと教団」『イスラームを学ぶ人のために』(大塚和夫、山内昌之編) 世界思想社、71-85 頁。
- ii 仁子寿晴 2002 「書評：Alexander Knysh. *Islamic mysticism : A short history*. E. J. Brill, 2000, pp.358」『中世思想研究』44 : 163-165。
- iii 東長、上掲書、85 頁。
- iv E.g. Arthur J. Arberry 1998 (1942) *An Introduction to the History of Sufism : the Sir Abdullah Suhrawardi Lectures for 1942*. London : Longmans, Green and Co., Julian Baldic 1989 *Mystical Islam : An Introduction to Sufism*. London : I. B. Tauris, Anne-Marie Schimmel 1975 *Mystical Dimension of Islam*. Chapel Hill : The University of North Carolina Press, John S. Trimingham 1971 *Sufi orders in Islam*. Oxford & New York : Oxford University Press.
- v Gisela Webb 2006 “Third Wave Sufism in America and the Bawa Muhaiyaddeen Fellowship,” in Jamal Malik & John Hinnells (eds.), *Sufism in the West*, London & New York : Routledge, 87-91.
- vi C.f. James Beckford 1992 “Religion, Modernity and Post-Modernity,” in Bryan Wilson (ed.), *Religion : Contemporary Issues*, London : Bellew, 16f., Fabrice Blée 2009 “Toward a Culture of Peace,” in Arvind Sharma (ed.), *The World’s Religions after September 11. Volume 4 : Spirituality*, CT : Praeger Publishers, 181-185.
- vii Jamal Malik & John Hinnells (eds.) 2006 *Sufism in the West*. London & New York : Routledge, Martin van Bruinessen & Julia Day Howell (eds.) 2007 *Sufism and the ‘Modern’ in Islam*. London & New York : I. B. Tauris, Catharina Raudvere & Leif Stenberg (eds.) 2009 *Sufism Today : Heritage and Tradition in the Global Community*. London & New York : I. B. Tauris, Ron Geaves, Markus Dressler & Gritt Klinkhammer (eds.) 2009 *Sufis in Western Society*. London & New York : Routledge.
- viii E.g. Benjamin F. Soares 2007 “Saint and Sufi in Contemporary Mali,” in M. van Bruinessen & J. D. Howell (eds.), *op. cit.*, 76-91.
- ix E.g. G. Klinkhammer 2009 “Sufism Contextualised,” in C. Raudvere & L. Stenberg (eds.), *op. cit.*,

- x 「タリーカ」の領域が政府の管理統制によって「教団」に留まっていく過程を近代エジプトの事例を通して詳細に綴ったものとして以下が参考になる。高橋圭 2006 「タリーカの制度化とスルフィー教団組織の成立—18世紀後半から20世紀前半エジプトにおけるタリーカの変容」『オリエント』49(1) : 88-109。また「タリーカ」の語の多義的な様については以下が参考になる。堀川徹 2005 「タリーカ研究の現状と展望—道、流派、教団(タリーカ)」「イスラームの神秘主義と聖者信仰」(赤堀雅幸、東長靖、堀川徹編)東京大学出版会、161-185頁。
- xi 中田考 2004 「宗教学とイスラーム研究」『宗教研究』78(2) : 27-51、2004 「イスラーム学のパラダイム転換—オリエンタリズムから一神教学際研究へ」『基督教研究』66(1) : 1-9、中村廣治郎「宗教学から見たイスラム研究」『宗教研究』78(2) : 1-26。
- xii 例えば本邦には日本オリエント学会と日本中東学会という「イスラーム研究」者が所属する二つの主たる学術団体がある。両会は「オリエント」という歴史学的概念と「中東」という地政学的概念をその名に冠し、上述した「イスラーム研究」の状況を示している。西洋の「イスラーム研究」者が所属する学術団体を見回しても、欧州中東学会(European Association for Middle Eastern Studies)や北米中東学会(Middle East Studies Association)など、宗教名「イスラーム」の語を冠したものはあまり目立たない。
- xiii 住家正芳 2004 「宗教概念と世俗化論—「近代化と宗教」をどう問うべきか」『〈宗教〉再考』(島薗進、鶴岡賀雄編)ペリカン社、175-176頁。J・カサノヴァ 1997 『近代世界の公共宗教』(津城寛文訳)玉川大学出版部、B・R・ウィルソン 1979 『現代宗教の変容』(井門富二夫、中野穀訳)ヨルダン社、Th・ルックマン 1976『見えない宗教—現代宗教社会学入門』(赤池憲昭、ヤン・スイングドー訳)ヨルダン社、P-L・バーガー 1979 『聖なる天蓋—神聖世界の社会学』(蘭田稔訳)新曜社。
- xiv そこでさらに焦点が当たられるのは世俗主義の権威主義的性格であり、それは脱呪術化され、理性を身に付けた個々人によって社会が構成されるという「近代化」が、イスラーム世界においては啓蒙主義的脱イスラーム主義と言うべき教条的な政治勢力を生み、聖性を持たない権力統制の下で(諸)宗教が平和的共存を果たすという「世俗主義」が翻って政治的不安定や宗教弾圧を生むという逆説的状況を示す。澤江史子 2008 「イスラームと世俗主義」『イスラーム世界研究マニュアル』(小杉泰、東長靖、林佳世子編)名古屋大学出版会、421-424頁、John. L. Esposito 2000 "Islam and Secularism in the Twenty-First Century," in John L. Esposito & Azzam Tamimi (eds.), *Islam and Secularism in the Middle East*, London : Hurst, 1-12. この問題は必ずしもイスラーム世界に限った話ではないが、20世紀のチュニジア、トルコ、イラク、シリアなどに見られた反宗教的な世俗主義には多くのイスラーム／中東研究者の関心が集まり、世俗主義政府と宗教勢力との対立や緊張関係について分析が進められた。以上に該当しない世俗化考察としては、非イスラーム世界のイスラーム研究では多く取りあげられないものの、現世中心主義 *dunyāwiyyah* に関するものが挙げられるだろうか。C. f. Azzam Tamimi 2000 "The Origins of Arab Secularism," in J. L. Esposito & A. Tamimi (eds.), *op. cit.*, 13f. とはいえた現世中心主義を「世俗主義」と理解とする議論は、20世紀ド

イツの神学者である F・ゴーガルテンの事績を想起させるように、宗教諸科学の世俗化論よりはむしろ西洋の神学議論との近似性を示す。ゴーガルテンは聖書世界を「世俗化(=現世)」の原点とし、人間が現世に留まりつつ来世での救済を求めるキリスト教的「世俗化 Säkularisierung」を、人間存在の有限性を理解しない「俗物根性」と呼ばれるべき單なる現世利益中心主義としての「世俗主義 Säkularismus」から区別した。フリードリヒ・ゴーガルテン 1975 「近代の宿命と希望」『現代キリスト教思想叢書』(熊沢義宣、雨具行磨訳)白水社、235-485 頁、金子晴勇 2001 『近代人の宿命とキリスト教』聖学院大学出版会。

- xv E.g. John O. Voll 1994 *Islam : Continuity and Change in the Modern World* (Second Edition), Syracuse : Syracuse University Press, 小杉泰 2001 「脅威か、共存か? 「第三項」からの問い」『増補：イスラームに何がおきているか — 現代世界とイスラーム復興』(小杉泰編)平凡社、23-24 頁、飯塚正人 2008 『現代イスラーム思想の潮流』山川出版社、44-47 頁。
- xvi 大塚和夫 2004 『イスラーム主義とは何か』岩波書店、170 頁、2004 「イスラーム世界と世俗化をめぐる一試論』『宗教研究』78(2) : 401-426。
- xvii ただし社会学の関心としての世俗化論を出発点に H・アーレントや J・ハーバーマス、ハーバーマス批判を含む多文化主義、カサノヴァ批判を含む T・アサドなどの議論を援用した公共圏や公共宗教を巡る議論を参照するイスラーム研究の事績は見られる。E.g. Armando Salvatore 2007 *The Public Sphere : Liberal Modernity, Catholicism, Islam.* Hants : Palgrave Macmillan.
- xviii 深澤英隆 2006 『啓蒙と靈性 — 近代宗教言説の生成と変容』岩波書店、16-17 頁。深澤は同語の確立を具体的にロマン主義と F・シュライアマハーの影響と述べる。
- xix 島薗進 2007 『スピリチュアリティの興隆 — 新靈性文化とその周辺』岩波書店、61-69 頁。また本稿の注 6 で挙げたイギリスの宗教社会学者、J・ベックフォードも既存の宗教伝統に対して排他的ではない「スピリチュアリティ」の側面を主張する人物である。伊藤雅之 2004 『現代社会とスピリチュアリティ』 溪水社、35-37 頁を参照。その他、以下にあるようなホスピスの例は、組織化された宗教によって提供される「スピリチュアリティ」言説の在り方の一端として参考になる。浜崎盛康 2008 「スピリチュアリティと宗教、および生きる意味について」『琉球大学法文学部紀要：人間科学』22 : 1-21。
- xx Julia Day Howell 2009 "Modernity and Islamic Spirituality in Indonesia's New Sufi Networks," in M. van Bruinessen & J. D. Howell (eds.), *op. cit.*, 239. これまで spirituality は「スーフィズム」あるいはその周辺概念を表すアラビア語の訳語として教学書や理論書などで用いられてきたが、後述するように本稿は今日のスーフィズム研究の文脈で同語が用いられることを単なる翻訳上の問題とは捉えていない。
- xxi Anne-Marie Delcambre 2007 *Soufi ou Mufti? Quel Avenir pour l'Islam?* Paris : Desclé de Brouwer, 17f.
- xxii R. Geaves, M. Dressler & G. Klinkhammer (eds.) *op. cit.*, i. 「 」内強調点著者。
- xxiii 事実確認を中心とした詳細は以下を参照。東長靖 2010 「スーフィー教団の革新と再生」『イスラームの歴史 2 : イスラームの拡大と変容』(小杉泰編)山川出版社、68-97 頁。Ron Geaves 2004 "Who Defines Moderate Islam 'post'-September 11?" in Ron Geaves, Theodore Gabriel,

Yvonne Haddad & Janne I. Smith (eds.), *Islam & the West Post 9/11*, Hampshire : Ashgate, 67.

xxiv この点に關係して、イスラーム学者の中田考は「なぜか原理主義にくくられないスーフィー教団」と題して問題提起を行なっている。中田考 2006 「イスラームと原理主義 — 歪められた実像」『原理主義から世界の動きが見える — キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』(小原克博、中田考、手島勲矢)PHP 研究所、205-207 頁。

xxv これは西洋のコンテクストに限った話ではない。A・クリストマンはスーフィーの著作家を例にとり、現代のスーフィズムの主たる課題がその軍事勢力としての性格を宗教団体としての性格から切り離す、つまり軍事勢力としてのイメージをスーフィズムから払拭することだと分析する。Andreas Christmann 2008 “Reclaiming Mysticism : Anti-Orientalism and the Construction of ‘Islamic Sufism’ in Postcolonial Egypt,” in Nile Green & Mary Searle-Chatterjee (eds.), *Religion, Language, and Power*, London : Routledge, 59.

“Critiques of the Western views on Sufism : through the Transition of the Western Discourses on Religion and the Modern”

Kenichiro Takao
Graduate School of Theology, Doshisha University

Abstract :

This paper aims to explore, through the reference to transition of the Western discourses on religion and modernity, the issue found in the recent researches of the West on Sufism (Islamic mysticism). Sufism in the context of Islamic modern is often defined to have lost its organizational and ideological influences to Muslim society. On the other hand, the recent Western researches tend to reevaluate Sufism focusing on its diverse and heavyweight roles. I review these recent trends of the Western discourses which regard Sufism as a spiritual alternative of Islam, and point out the parallel condition of this type of Sufi discourses with religious discourses in postmodern context. Then, I criticize incoherence of terms and epistemological errors of expectations confirmed in which the Western researches express that Sufism is non-‘fundamental’, ‘secularized’ form of Islam, therefore that it must have affinities with the modern Western society. At last, I note a linkage between Sufi discourses and Islamophobia. As a result, this paper concludes that to evaluate Sufism in the Western context today could play a role in excusing, rather in camouflaging the Western Islamophobia.

Keywords : Fundamentalism, Islamophobia (Phobia about, or Aversion to Islam), Study of Religion, Secularization, Spirituality